陳舜臣が描き出す〝落地生根〟の行方

――『枯草の根』を起点として――

大橋毅彦

一　〈落地生根〉を地で行く者・そうでない者

少年時には新聞の「神戸版」にほぼ毎日掲載される「出船入船」情報に心躍らせて港の突堤に足を運び、長じてからは神戸の海に面した書斎の窓の下で想を練り数多の作品を書き綴っていった(1)作家陳舜臣、彼の作品の魅力はどこにあるのか。一口で言えば、それは該博な知識を動員して、その舞台空間を自らの生れ育った神戸からアジア全域にまで広げていくスケールの大きさと、歴史の波濤に揉まれながらそれぞれの生の拠り所を求めていく人々が分泌するエモーショナルなものを鮮やかに浮かび上がらせていく点にあろう。この小論では彼の文壇デビュー作『枯草の根』（一九六一・一〇、講談社）を中心にして、そうした文学的特質を具体的に探っていこうと思う。その手始めに、小論タイトル中に記した〈落地生根〉という言葉を取り上げてみる。

JR神戸線元町駅西口を出て海に向って歩くこと四、五分、南京町の西安門を過ぎて海岸通りにぶつかった所にある「神戸華僑歴史博物館」見学の際に手渡される栞に載っている解説中の言葉を借りれば、〈落地生根〉とは「一人の人間が遥か故郷を遠く離れて、海を越え、異国の地に渡り、その土地の人と睦みあい、その地の習慣にもなじみ、

家業をおこし、子や孫に囲まれて円満な家庭を築き、やがてその地の土に帰するさま」を意味する言葉、そしてこの栞が手渡される場所を念頭においてもう一言付け加えれば、それは神戸華僑の生き方の核にあるものを最大公約数的に言い表したものである。むろん、記録に残っているだけで神戸訪問は一八回あっても、そのいずれもがこの街での一時的滞在であった孫文とは違い、陳舜臣の場合は、父親が日本の海産物を中国・東南アジアに輸出する日本人商社に招聘されて、一家を挙げて台湾から神戸に渡った直後の一九二四年に生まれ、アジア太平洋戦争終結直後に約三年間台湾で暮したことを除けば、二〇一五年にこの街で没するまで、神戸をわが町として〈落地生根〉を地で行った人物だったわけであり、そうした人生の選択をした自らと近い立場にある人たちも、また自ずから彼の創作世界に多く顔を覗かせている。いまから論じる『枯草の根』もその例外ではない。とともに、この小説は題名にもそのことが暗示されているように、自らの希望とは裏腹に神戸の街に根を下ろすことに失敗した人物にも焦点を当てた作品であることも強調しておかねばならない。ただし、根を下ろす、根を下ろせないという問題は、あくまでもストーリーの一郭を切り取った時に指摘できることであるにすぎない。問うべきは、推理小説という枠を持ちつつ、登場人物たちの間で交わされる言葉のやり取りや、ちょっとした風景の描き方が、どのような読みの醍醐味を読み手に味わわせていくのか、そしてそれがデビュー作とは言い条、どれだけユニークでなみなみならぬ人間観察力を感じさせる作家的炯眼に支えられているのか、ということであると考える。

二　構成と計算の妙

第七回江戸川乱歩賞受賞作『枯草の根』は一九六一年一〇月に講談社から刊行された。その少し前から社会派推理小説を代表する作家として注目を浴びだしていた松本清張、水上勉の代表作である『砂の器』や『飢餓海峡』が単行

本として刊行されたのと近接する時期にあたる[2]。

全体で三五章仕立てのこの物語は、南洋の著名な実業家席有仁が、戦争終結後一〇数年の歳月が流れた現在、初めて神戸を訪れるところから始まる。到着早々、新聞事業にも関わる彼は、自身の出資する新聞社からの依頼に応えて日本見聞記「東瀛游記」の執筆にとりかかるが、そこには、かつてシンガポールが「昭南」と呼ばれていた時に抗日団体の幹部だった自分が、いまこうして日本に遊ぶ日が来たことを思っての感慨と、それよりさらに遡って事業家としての駆け出し時代に苦境に陥っていた自分を救ってくれた、その当時の上海で銀行を経営していた「L董事長」とこの神戸で初めて顔を合わせることへの期待とが記される（「一　プロローグ　十二月一日」）。

未読の方には申し訳ないが、先に推理小説『枯草の根』のストーリーラインも紹介してしまおう。前段からつなげると――しかし、席有仁を神戸の港で出迎えたのは、彼の恩人の「L董事長」すなわち李源良ではなかった。李源良の影武者のごとき存在として実業の世界を生き抜いてきた男李東昌が、半年前に東京で李源良が交通事故死したのをきっかけにしてその名を騙り、神戸に仕事の拠点を移していたのである。そして、席有仁と李源良とが一度も相まみえたことがないのを利用して、五興公司という小さな貿易会社の社長「李源良」に成りすましたまま大実業家席有仁を出迎え、巨額のマージンが得られる有利な取引を行うことを企図するのである。だが、李東昌の素性を知り（小論では、これ以降彼を名指すときには「李社長」と「李東昌」の呼称を併用することとする）、彼の実業家としての野望を台無しにしてしまう恐れのある人物が現れる。起こるべきは殺人。そして、五興公司が入っている、海岸通りにある同じビルの地下にある中華料理店「桃源亭」主人で、日本に居ついてから二〇数年間を経ている陶展文が事件の解明に挑んでいく。

第七回江戸川乱歩賞選考委員の一人である江戸川乱歩の選評「秀作を得て欣快」（「宝石」一九六一・一〇）中に、「純本格もので、トリックもよく考えてあるし、そのトリックを見破る手掛りに面白い着想が使われている」という

評言があり、陳舜臣が「推理小説私観」（『よそ者の目』〔一九七二・七、講談社〕所収。原題は「変りつつある推理小説」で『現代推理小説大系』第一巻〔一九七二・五、講談社〕所収）で口にしている「もちろん犯人が誰であるとか、どんなふうに解決されるかといった場面は、推理小説であるからには、最初から決定していなくてはならない」という考えもそれと呼応している。こうした推理小説の定型に関わる側面を云々することが小論の主旨ではないのだが、それでもある程度の確認作業は必要だ。できるだけ紙幅をとらないようにして、この長篇推理小説がどんな計算のもとに組み立てられているのかについて見ておこう。

まずは李東昌の秘密を知る人物の設定である。三人いるが、一人目がトーア・ロード沿いの路地でアパート「かもめ荘」を経営するとともに高利貸し業も行っている徐銘義老人である。陶展文とは象棋仲間で、漢方医の腕を持つ陶に事あるごとに往診を頼む神経質な「慎重居士」といった趣のある徐は、李源良が董事長、李東昌は秘書であった上海の興祥隆銀行に計算係として勤務、二人の西欧視察中に上海に来た席有仁の接待役を勤めたことがある。この徐銘義が、神戸に移ってから半年後の李東昌とトーア・ロードではからずも再会、そして席有仁が来神しているとの情報も象棋仲間の陶展文から得て、李東昌の事務所を訪ねて来る。その時は席有仁が不在で事なきを得たが、この先、徐銘義がどんな行動に出るか――李東昌の心の裡に殺意が生じる。

二人目が市会議員吉田庄造の甥の田村良作。堅気の勤めより曰くありげな仕事の方が好きな男である。戦後上海での銀行経営が破綻、香港を経て東京へ流れ着いた李源良と李東昌が、小さな会社の輸出部での仕事に就いた時、同じ職場にいたのが田村だった。その田村がうだつの上がらぬ東京生活に見切りをつけて来神、地方有力政治家の叔父の使いで席有仁宛ての招待状の取次ぎを頼むために五興公司を訪問、李東昌と再会してしまう。犯罪すれすれのゆすり、恐喝まがいのことをしでかしかねないこの男が席有仁招待の宴に出てきて、そこから関わりを持ち出したならどうなるか、李東昌はそういう問題にも直面させられる。

そしてあと一人が李源良の姪の李喬玉。アメリカに留学した喬玉に最後に会ったのは彼女が十四、五歳の頃だった李東昌は、結婚してアメリカにいるつもりだと聞いていた彼女のもとに伯父の事故死を伝えた。すると、思いがけないことに香港への赴任が決まった夫とともに喬玉は来日、東京で伯父の墓参りを済ませた後、李東昌に会うために来神し、五興公司を訪ねる。たまたま李社長は席有仁を滞在先の山手のホテルに送りに行っており不在。その席有仁と喬玉は、視察旅行で席がアメリカを訪れた時に会っている。席有仁が五興公司の社長李源良だと思っている人物がじつは李東昌であることを知っており、加えて席有仁ともつながっていたために、李喬玉と同じ立場にある徐銘義と田村の二人は殺害されたが、はたして彼女も犠牲になるのか。

次に、事態を迷走させる人物や、一種狂言回し的な存在を配置することによって、ストーリーを膨らませる点でかなりの出来栄えを示していることも指摘しておこう。乱歩の評言を借りれば「プロットも充分水準以上」(3)と対応するこの点についてごく簡単に記しておくと、吉田庄造を犯人候補とするストーリーも立ち上がっている。すなわち、業者と官庁の間を取り持って前者から多額の謝礼金を徴集している吉田は、保身を図るため専属の「トンネル」を用意しているが、その役を務めていたのが徐銘義だったのである。ここにいわゆる口封じとしての殺害動機が浮上してくる。そして吉田犯人説を唱える新聞記者小島の存在。拳法家としての一面も持つ陶展文の一番弟子を任じ、桃源亭に出入りして家族同様の付き合いを陶一家としている小島青年は、事件の解明に向うストーリーライン上においては、吉田が首謀者であることの立証を得ようと躍起となって動き回る狂言回しの役割を振り当てられていると言えよう。その他にも、徐銘義の死体を発見したかもめ荘の管理人の清水と徐とが、清水の別れた妻をめぐって浅からぬ因縁のあったこと、金の貸借をめぐるいざこざから高利貸しを副業とする徐のもとに脅迫状を送り付けた辻村が彼の死後にその手紙を持ち出したことも、物語の筋を絡ませる上で一役買っている。

トリックと事件解決へのプロセスがどんなものであるかについても触れておこう。その前提として徐銘義殺害当夜

の状況を振り返っておくと、陶展文と彼の友人で商売は女房に任せっぱなしの安記公司社長の朱漢生とが、かもめ荘の徐銘義の居間で象棋を打っていると、五興公司の李社長が訪ねて来た。陶と朱はかもめ荘を出て象棋の続きをするために穴門筋にある朱の自宅に向い、李社長もほどなくかもめ荘を辞す。その姿は管理人清水も見ており、李と短い会話も交わしている。李社長の退去後、今度は小男がかもめ荘に入ってきたのを清水は眼にとめ、彼の足音が徐の部屋の前で止まってドアのあく音を耳にするが、お目当てのテレビ番組がそろそろ始まることに気を奪われて、彼の出て行く姿はさして気には留めていない。次いでその番組「私だけが知っている」が始まってまもなく、喫茶店ホワイトホースの店員の春ちゃんが、いつものように徐からの注文電話を受けてコーヒーを配達、応接間でコーヒーを注ぎながら居間で誰かと象棋を差す徐の後姿を目にしている。さらにその後、向かいの部屋の住人が、誰かが口笛を吹きながら徐の部屋に入っていく音を聞いた。以上の人の出入りがあったのが夜の八時から九時半、徐の絞殺死体を管理人が発見したのは翌日午後だった。

これらの怪し気な人物たちの中から、いかにして李社長（李東昌）が犯人であるとの推理が組み立てられていくのか。そこで用いられるトリックの一つに〈時計〉を用いたそれがある。すなわち、犯行当日の昼、慎重を期するためにかもめ荘に一度やって来た李社長は、なにかトリックをしなければならないことを漠然と感じ、そのために管理人室に掛かっている五分遅れの時計に自分の腕時計を合わせている。むろん、それは「告白書」（「三二　告白書」）に彼が書き残していることであって、その事実を陶展文は知らない。けれども、以下に記す出来事をつないでいくことによって、陶の李に対する疑惑が生じるのである。まず、その晩、徐の居間で李社長と一緒になった、日頃から横着な弊のある朱漢生が、ちょっとした機会をとらえて社長の腕時計を盗み見し、止まっていた自分の時計の時刻を合わせたのを陶は目にしている。一方、李社長は自分の立ち去る姿を管理人に印象付けるため、管理人室の五分遅れの時計が八時半の時刻を打った時、その前で立ち止まり、自分の時計を見てあえて首をかしげてみせる。朱の家で象棋の

続きをした陶展文は、新聞会館のチャイムが十時を報じたのを耳にしながら彼と別れる際に、李社長の時計に合わせた朱の時計が五分遅れであることを知った。そして、管理人からは彼の部屋の五分遅れの時計のチャイムを聞いて李社長が首をかしげたと聞かされる。なぜ、李社長は五分遅れの腕時計を見て、それが正確な時を刻んでいるかのようなしぐさをしてみせたのか――このようにして霧がとれかかってくる。

次いで陶展文の思考を進めさせるのが春ちゃんの証言。彼女のそれは、神経質な「慎重居士」である徐銘義のイメージを裏切るものばかりである。応接室にいた春ちゃんからは、扉の開いた隣室の居間でマスクをしてうしろ向きになった徐と象棋をしていた客人の方は、壁の陰になっていて見えなかったというが、それは居間に置かれたテーブルの位置がいつもと比べてずれていたことを意味する。それから彼女は、応接室のテーブルの上に客のオーバーが置かれていたり、ドアに鍵の束がさしたままであったことも見ているのだが、これらのことは、万事が自分の決めたとおりにきちんと行われなければ気の済まない、几帳面過ぎるくらい几帳面な徐の行動パターンにはそぐわないものである。現に同じ晩に陶と朱が訪れた時には、二人が応接室の事務机の上に脱ぎ捨てた上衣を徐はすぐに洋服ダンスの方へ運んでいっている。ならば、陶と朱も見たし、春ちゃんも見ている、マスクをかけて、赤いジャンパーを着こみ、頭に包帯を巻いていた（それより前、頭にできた吹き出物を気にして陶展文の往診を仰いだ徐は事件当夜も頭に包帯を巻いていた）徐はどうなのか。これとても風邪ひき加減の徐銘義は、応接室と居間との室温の違いに過敏に反応、二人がいたときには居間では実はマスクを外し、応接室に出て行く時には几帳面にもマスクをつけていたのである。

さらに物証に近いものも出て来る。それは象棋の駒だ。事件当夜、徐の部屋を辞する際、そそっかしい朱が象棋盤をひっくり返してしまった。その際に拾い集めて戻したつもりの真新しい象牙の駒の一つが、徐が殺された後、細君不在の留守宅で、朱のよれよれになっているズボンの裾から見つかったのだ。すると、あの日の夜、自分たちが帰った後で春ちゃんが見た、客人と徐が象棋に興じていたということは？その性格から推して、一つだけ違う種類の駒を

代用して徐が象棋をすることなどほとんどあり得ない。

こういう風にして、あの晩喫茶店の娘が見た、彼女の死角にいた客人と象棋を差す徐は犯人の偽装であるとの確信が固まった頃、陶展文は、李社長不在の東南ビルに訪れた李喬玉夫婦とばったり出会い、半時間ほど桃源亭で話を交わすことを通じて、彼女が訪ねようとしているのは李東昌であり、彼が李源良の名を騙っていることを知るのである。それが証拠には、陶展文と別れてホテルに戻る際のタクシーの中で喬玉と夫のマーク・顧との間で、「「それにしても、おどろいたな。じつにおそろしいことだよ」／「その話はやめて！」」といった言葉のやりとりがなされている。

三　黙劇と潜熱――探偵と犯人の心理上の対決

そして、陶展文と李東昌との対決シーンが描かれるのがその直後、章立てで言えば「二十八　伝言」である。自分の不在中に訪ねて来た女性が姪の喬玉であったことがわかり、彼女とは「ものの二分もしゃべっちゃおらんのですよ」という陶展文の言葉を聞いたあたりから始まる二人の会話は、表面上は何気ない穏やかな言葉を交わすかのようであって、その実、相手の心意を伺い、隙あらば相手の急所を刺していき、またそれから逃れようとする、緊迫した心理戦の様相を呈していく。彼らを取り囲んだ時間は静かに流れているが、それは同時に激しい潜熱を帯びている。高橋克彦言うところの「これは殺人の謎を解く物語ではなく、殺人を身近にした人間の興奮状態をテーマとしているのではないか」(4)といった文学的特性がよく現れているとともに、そうした興奮や緊張が一つの分水嶺を越えると急速に解放やカタルシスに向っていく側面も、たしかな手ごたえをもって描き出されているのがこの場面なのだ。

その徴はいたるところに現れている。たとえば互いの年齢をめぐっての四方山話の途中で陶がふと口にする「子供の成長のほかに、友人の死ということがありますよ。こいつにもガクンとくる」という言葉。それに対して李は相槌

を打ちながら「このあいだの徐さんの死は、私にとっちゃ大きなショックでした」と予防線を張るのだが、おそらくその直前に喬玉から事のあらましを聞いている陶が、李社長に思い出させたいその死に接してガクンとくる友人とは、いまでは彼がその人物に成りすましている李源良のことではないのか。このように二人が向い合う室内には緊迫した空気が立ちこめていくが、語り手は陶の目を通して、窓外には「薄暮の色が、すでにビル街をつつみはじめている。（中略）ビルのまえの通りには、解放されたオフィス・ガールたちの、さまざまなコートの色が流れて行く」といった何の変哲もない、いつもと変わらぬ光景があることにも読者の関心を向かわせていて、そんなコントラストの捉え方も上手い。

犯人捜しの物語としてのハイライトは、陶がポケットからまるい象牙の駒を取り出したところでやって来る。徐銘義の形見のその品は自分よりも彼とは古い付き合いのあるあなたが受け取るべきだと言い置いてから、陶が李社長に思い出させ、知らしめようとするのは、事件当夜の李社長のかもめ荘訪問の際に、あわて者の朱が象棋盤をひっくり返してしまったことと、その後いまここに取り出した駒が発見されるに至った顚末、さらに「あの男はおかしな駒じゃ絶対に象棋を差そうとはしませんでしたな」という物言いに端的に示される、徐銘義の例の性格である。それは換言すれば、自分たちが帰った後で、徐が誰かと象棋を差すことはほぼ百パーセントあり得ないこと、にもかかわらずホワイトホースの店員が象棋を差す徐を見たと言うのなら、それはほぼ百パーセント誰かが徐に変装していたことを指し示している。駒を受け取った際に「じっとその表面をみつめ」た李社長は、これらの話を陶が終えた時には、「『帥』と彫った赤い字を、喰い入るようにみつめ」たのである。

犯人は割れた――だが、それ以上の読み応えのある場面がこの直後に続く。残る問題は李社長をして姪の李喬玉に対する邪な心を発動させないことである。陶展文は十年以上会っていない伯父と姪と対面する場面に「是非立ち合いたいものですな」と言って、李の出方を牽制する。二人は廊下へ出た。以下、長くなるが本文を引用する。

陶展文は廊下へ出た。李社長も彼につづいた。
「階段のところまでお送りしましょう」
「ありがとう」陶展文も、強いて拒みはしなかった。
階段の横の上方に正方形のガラス窓があって、そこから空の一部が見える。赤いアドバルーンが、そこで揺れていた。
「では、ここで失礼します。私はオフィスへ戻って、ちょっとあと片づけ――そう、あと片づけをしなけりゃなりませんから」
そう言って、李社長は手をさしのべた。
「わざわざ送っていただいてありがとう」
陶展文は老社長の手を握って、言った。
李社長の面貌は、深山の老僧のように、枯れ切った感じであった。その秀でた顔にも、まったくつやがなかった。
陶展文が二、三段降りたとき、背後から李社長が、思い出したようにたずねた。
「喬玉さん夫婦は、どこのホテルにお泊りなのですか?」
「さあ、なんというホテルでしたかな?」陶展文はふりかえって、言った。「たしかホテルの名はきいたのですよ。それが忘れちまいましたな。いやはや、年ですなあ」
「喬玉さんは工合がおわるいそうですから（李は陶から自分の留守中に訪ねて来た喬玉が風邪気味でホテルにひきあげたことを聞いている。注大橋）、訪ねて行ってお邪魔をするつもりはありません。ただ、電話でもかけて、なつかしい声をききたいと思っただけです」

李社長はそう言って、上からじいっと陶展文の目をみつめた。
陶展文は黙っていた。しかし、しばらくしてから、彼の顔に春風のような、ほのあたたかい微笑がうかんだ。
「やっと思い出しましたよ。イースト・ホテルでした。そうですね、電話してあげたら、彼女よろこぶでしょうな」
陶展文のすがたが、階段を降りて一階の廊下へまがって消えてしまうまで、李社長は枯木のように、つっ立ったまま見送っていた。（「二十八　伝言」）

李社長の面貌の変化は、陶に事の真相を見破られたことに気付いたことに起因する。そうでいながら、あるいはそうであるがゆえに、その後「思い出したよう」に彼が李喬玉の滞在先を尋ねたことは、陶展文の心に一抹の不安を与えたのではないか。であるがゆえに「さあ、なんというホテルでしたかな？（中略）忘れちまいましたな。いやはや、年ですなあ」と磊落を装いながら、陶はここでも李を牽制、彼の出方を見極めようとする。それに対しての、姪を訪ねるつもりはない、「電話でもかけて、なつかしい声をききたいと思っただけ」という李の応答。そして、その後に生じたしばらくの沈黙と、「春風のような、ほのあたたかい微笑」を浮かばせながらホテルの名前を告げる陶展文の行為。この黙劇の進行過程にあって、陶は李社長の言葉が、彼の計略をカムフラージュするためにではなく、自身のこれまでの行為を清算する覚悟も併せ持った彼の真意から出たものであるとの判断を下している。対象としている作品は異なるが、陳舜臣編『陳舜臣読本 Who is 陳舜臣？』（二〇〇三・六、集英社）〔以降『陳舜臣読本』と略記〕に再録された、短篇集『方壺園』（一九六二・一一、中央公論社）についての野口武彦の解説中の言葉を借りれば、「敵を人間として承認するとでもいえるような感覚」（傍点原文）がここには現れている。そして、これも野口の表現を借りれば、そのようにして自分という人間を、単に「知る」ことを越えて「了解」（傍点原文）されたことを

察した李東昌は、その夜のうちに展文兄宛の「告白書」を認め、自らの命を絶つのである。

四　人物造型への意志——分泌物をどう語り明かすか

いま見てきた場面にもその特徴は端的に現れているが、前出「推理小説私観」の中で陳舜臣は、作品の創作にあたって、その組み立てに意を払うべきだがそれは「必要不可欠」のレベルにとどめ、「登場人物の分泌するものを、受け容れるスペースを残しておくべき」(5)といった見解を示している。権田萬治をはじめとして大抵の先行文献が取り上げてきた(6)発言であり、やや常套的なアプローチの傾向に流れるかもしれないが、この人物造型への意志がどのように達成されているのかについて、小説の構成上の問題も含めてさらに言及したい。

「登場人物の分泌するもの」の最も見やすい例は、小説の結末近くに置かれた「三十二　告白書」「三十三　告白書つづき」であろう。講談社文庫版『枯草の根』の本文は二九七頁だが、この二章だけで三一頁というように、分量的には李東昌の内面がそれだけ書き込まれていることがわかる。前出高橋克彦の解説は、その点に関して「読者によっては、すべての謎を犯人の告白に任せるやり方を安易と見る向きもあろうが、その部分こそ作者の強い思いが含まれているということを分かっていただきたい。探偵役の推測などで済ませたくなかった真実の声がそこにある」と述べている(7)。一方、ともすれば忘れがちになるかもしれないが、小説の始まりの箇所（「一　プロローグ　十二月一日」）に早くももう一つの〈告白書〉、すなわち席有仁が書き出した「東瀛游記」の一節が置かれていることを、作品の構成上の特徴として押さえておきたい。

そして、見聞記と罪状告白というようにその種類は違ってはいても、そこに書かれたものを通して現れてくるのは、もしそれを書かないでいると「筆者の心の状態を幕の彼方にかくしてしまうことになる」と、「東瀛游記」を書

き出すにあたって席有仁が断っているように、社会や世間が見慣れている人物像の奥にあるもの、先にあるものである。すなわち、席有仁「東瀛游記」の場合では、李源良との再会を前にして、大実業家として何事も果断に処置していく性情とは結びつかない「こまかい感傷」が随所に顔を出していくのであり、見るからに垢抜けしたイギリス風紳士に見え、言葉つきや挙措の優雅さに育ちの良さがにじみ出していると人の目には映る五興公司社長も、李東昌として「告白書」の中に現れて来る時、「産業界になにがしかの爪の跡を残す」ための野望を滾らせた姿を前面に押し出しているのである。

李東昌と席有仁の人生がそれぞれ彼等自身のものたり得ていく理由は、戦前から戦中にかけての中国や東南アジアにおける時代のうねり、その飛沫を二人が思う存分浴びて、社会と歴史にコミットしていくところにも求められる。

たとえば、学生時代の李東昌は、「熱烈な愛国者」として「中国経済進展要綱」なる計画書を作成した。そこには「天津が十五の突堤をもつ不凍港となり、揚子江の河口に上海にとってかわる大都市が建設され」る夢が繰り広げられていたが、それは時代との繋がりで見れば、国父孫文が中国人としての民族意志の発現として一九二二年に公にした、上海を中心とする国土の大改造計画であるところの「建国方略」を連想させるものである。陳舜臣はこうした近現代の中国の国内事情に関する該博な知識を活用しながら、作中人物の人生に時代の刻印を打っていく。董事長の李源良に代わっての理想主義者李東昌の働きによって、幾多の艱難を乗り越えて民族産業の支柱として発展してきた興祥隆銀行が、官僚資本の専横によって「名誉ある没落」を迎えることについても、戦後上海の経済界の状況についての『枯草の根』執筆時点での中国学界での主流的な見方(8)をふまえた叙述を行っていると言えよう。

同様に、シンガポールの埠頭苦力から身を起こした席有仁が、アジア太平洋戦争開戦直前には「抗日救国委員会」の副委員長の地位にあり、日本軍のシンガポール占領の際に「ペナンにのがれて身をかくした」という設定も、シンガポール側の認識では五万人が犠牲になったとされている、日本軍が行ったシンガポール華僑粛清をもとに発想され

たものだと考えられる。奇しくもシンガポール市内の住宅団地の造成工事現場から、その折に虐殺に遭った住民の大量の遺骨が発見され、これを機に本格的な遺骨の発掘作業が全島で開始されたのは『枯草の根』が刊行されたのと同じ一九六一年のことであり、また稲畑耕一郎が席有仁のモデルの一人に数え上げている(9)陳嘉庚――シンガポールで「南洋華僑籌賑総会」（南僑総会）を創設して抗日運動の中心的人物となり、日本軍のシンガポール占領の年（一九四二年）にはジャワへ避難した――がその生を終えたのも一九六一年であった。この南僑総会のメンバーの一人だった林謀盛は、日本憲兵隊に逮捕され獄中死したのだが、それと同じように逃げ遅れてつかまった抗日団体の主要幹部が銃殺されるという状況下で過ごした潜伏生活のことを今でも夢にみる席有仁であればこそ、現在の自分がここ日本の地にあって、実業家として目の前にある課題と取り組むべきであることを新たに思い起こし、自身の精神を奮い立たせていくのである。

席有仁と李東昌の歩みが二人の生きてきた時代と密接に関わることのあらましを見てきた。しかし、彼らの人生のありようは、歴史上に記された大きな物語の中に回収されて已んでしまうものではない。人がその人生の中で体験することは、他者のそれと置き換えのきかないその人だけのものであり、文学作品が登場人物が分泌するものを受け容れるスペースを作るとは、それをたしかなものとして読者に伝えていく点にあると思う。たとえば席有仁が自らの潜伏生活を振り返った時、そこにはどのような彼の姿が現れてくるのだろうか。

……あのころは、よく爆音を耳にしたものだ。しかし、あの四角い空は、あまりにも小さかった。機影がそこをかすめたことは、いちどもなかった。もし、つづけて二機、あの空の切れはしを横ぎれば、なにかいいことがある、――席有仁は勝手にそうきめて、ながめていたものだ。なにも考えないで見つめるよりは、そう考えてでもいたほうが、すこしは張り合いがあるような気がした。……いつ日本人がつかまえにくるか、一日じゅうその

恐怖がくらいついていた。（「十七　葬儀の通知」）

ペナンで豆腐屋をしている旧友の家の納屋にかくまわれた彼が為すことといったら、その部屋の天井にあけられた四角い窓をじっと見つめて、願掛けにも似た思いを反芻することであった。それは、現在著名な実業家として雄々しく立っている自分と比べれば、まるで嘘のような、影絵のような自分である。だが、それもまた、あの時にあっては紛う方なき自分の本当の姿なのである。仲間を失って孤立し、窮地に追いつめられて極限状況の中に投げ込まれた時に、はたしてどうやったら自分の心の拠り所や生の希望を見出せるのか――それが「四角い窓」のエピソードを借りて、この人物にしかできないかたちで求められ、表出されている。

そして、席有仁の回想の裡に現れるこの光景と、読みようによっては繋がりを持つ印象を与えてくるのが、陶展文と李東昌の対決シーンの後半、二人の別れ際にさりげなく描かれる以下の光景ではないか。すでにその部分も含めた本文は引用したが、ここであらためて当該箇所を含む前後数行を引いておこう。

陶展文は廊下へ出た。李社長も彼につづいた。

「階段のところまでお送りしましょう」

「ありがとう」陶展文も、強いて拒みはしなかった。

階段の横の上方に正方形のガラス窓があって、そこから空の一部が見える。赤いアドバルーンが、そこで揺れていた。

「では、ここで失礼します。私はオフィスへ戻って、ちょっとあと片づけ――そう、あと片づけをしなけりゃなりませんから」

そう言って、李社長は手をさしのべた。

この時点で、李社長は自分が犯してきた行為を陶展文が知っていることを悟り、ほぼ自身の身の振り方を決めている。それは、「あと片づけ」をしなければならないという言葉を自分に言い聞かせるように繰り返していることから想像がつくのだが、この時、読者である私たちは李に代わって、階段の上方に据え付けられた正方形のガラス窓を通して赤いアドバルーンが揺れている空の一部を目に入れる。それは一日の終りを告げる、その日最後の明るさを残した空であるが、こんなふうに窓で切り取られた空を見つめていた席有仁のその後の人生が彼の心に矜持を与えるものであることを知っている私たちは、それにひきかえ、いまここに見える空が、個人の生活を犠牲にして民族資本家としての生きざまを全うしようとしながらも道を踏み違えてしまった、李社長のそういった人生にとっての最後の明るさを残した空であることを思って感懐をあらたにするのである。

李社長の心を埋め尽くしている思いは、彼の死後、「枯草の根を悼む」という祭文を念頭に浮かべた陶展文が、最終章「三十五　エピローグ　十二月三十一日」中で、「地中深く張り、まわりの土壌とすっかりなじんだ強靭な根が、にわかに草を失ってしまった。これまで人びとは、土のうえの草しかみていない。根はなおも、いやこれからもっと強く、生きつづけようとするのに」というように、彼に代わって口にしている。これとても李東昌が分泌するものを示しているものだし、小説の題名と絡めてその主題を確認するといった観点からすれば看過できない一節なのだが、それが文字通りに説明されているだけのものといった印象を拭い去ることはできない。つまり、読めばそのまま分かることなのだ。登場人物が分泌するエモーショナルなものは、このようなあからさまな叙述とは別に、前の段落で述べたように、ともすれば何気なく読み飛ばしてしまうような言葉からも滲みだしてくるのではないか。

そう考えて、再度、くだんの場面に戻ってあと一言付け加えたい。李社長が口にした「あと片づけ」を「告白書」

を書くという意に解釈したが、この後で喬玉の滞在先を聞き出そうとした点から、まだ李の裡に自分の逃れる道を求めようとする情動が消え去ってはいなかった、あるいはそれに再び火が付いたということが仮定できるとしたら、その場合「あと片づけ」とは、この後の彼の行為が「告白書」を書くことではなく、より禍々しいものであることを示唆してくるかもしれない。そして、もし、そうした不安を駆り立てるものがまだあるとしたなら、いま私たちがみている景色はどのように感得されるであろうか。おそらく、この赤いアドバルーンがそこで揺れている、静かで、遥かな感じを与える空は、先取りされた未来に現れる李の猛々しい心を、それが発動する一歩手前で吸い取っているのではないだろうか。

五　火種としての上海・「愛撫」する視線――『枯草の根』その後

終りに、陳舜臣が『枯草の根』の人物造型にあたってとった試みが、その後どのように枝葉を広げ、繁らせていったかについて、若干の見取図を呈しておきたい。

たとえば、この作品の発表から三〇年もの歳月が流れてから刊行された『夢ざめの坂（上）・（下）』（一九九一・六、講談社）の場合。妻を亡くした主人公浦上隆志の前に現れた杉坂房子が、失踪した夫探しを依頼するところから始まるこの小説は、やがて隆志の出生と生い立ちをめぐる謎、彼の生母と亡き妻晴子と房子との間に取り結ばれた不思議な繋がりが明らかにされていくというように、殺人という血は流れたりせずとも長篇推理の趣をふんだんに湛えた作品なのだが、この中の数多の登場人物に対して、陳舜臣は日中戦争という歴史の飛沫をやはりふんだんに浴びせていく。とりわけ注目すべきは、登場人物の一人に「火の種は、やっぱり上海」と言わせているように、『枯草の根』に登場する李東昌の半生のドラマがそこで繰り広げられた〈上海〉という場所をここでも大きく取り上げ、日中戦争

下のこの街の歴史と、そこで営まれた人びとの生に深く測鉛を下そうとしている点である。

それは、具体的に言えば、その当時はまだ幼かった隆志の父で重慶側の地下出版に協力した日本人、その妻で日本憲兵隊本部に縁故を持つ彼がそこから摑んでくる日本軍の情報を味方に伝える中国人女性、そして彼女との連絡係を務めながら、人妻であり、一児の母親でもあるその女性を愛していることを自覚していく地下工作員の中国人男性とが味わう、人間的な喜びや苦悩の物語である。

小説中、この三人の男女をつなぐものとして「銜石（かんせき）」という抗日雑誌が重要な役割を果たしているが、それは一九八〇年代後半から九〇年代前半にかけて、上海のいわゆる「孤島文学」に興味を抱いて上海社会科学院を訪ね、同科学院外事主任となっていた台湾での旧知杜長庚を通じて調査を重ねた[10]ことから着想されたものであろう。現在、趙夢雲の調査[11]が明らかにしているように、中国共産党地下党員の手になる雑誌「莘莘月刊」の刊行を、上海市政府教育処副処長であった日本人上野太忠が許可したという事実はあっても、終戦の年の重慶側の地下出版にひそかな助力を与えた日本人の存在については未詳であることから、こうした設定にはフィクションとしての性格も付与されているかもしれない。けれども、近年になってようやくそれについての研究の気運が高まってきた戦時上海のグレーゾーンの実態に、早くも作家がこのようなかたちで切り込んでいることには驚かされる。

ただ、作中に描き出される人間たちが付随させている幅や厚みといった点を『枯草の根』と比較した時、主人公の母親呉照とその一族、さらにそこにつながる人びとが相当数登場してくるため、それらの人びとの錯綜した関係をあの手この手を用いながらほぐしていき、物語を結末にまで導いていくための筋の運びの方に作者はかなりの力を割かれてしまっているように思われる。呉照を愛し始めた中国人男性がそのことを小説化した「弓満の悩み」が作中作として挿入されて、あたかも李東昌の「告白書」と近い印象をもたらしてくる場面もあるにせよ、総じて言えば『夢ざめの坂』の人物造型はその輪郭線を提示するにとどまっている感がある。

さて、それに比べると、この小説や『枯草の根』と同じく神戸の街を舞台とし、日中戦争の裏面史もふんだんに織り込んだ長篇推理小説『燃える水柱』（一九七八・一二、徳間書店）に出てくる人間たちの方が、例の〈分泌〉物をより多く持っているように思われる。単行本刊行直後に発表された「異人館周辺」（「オール読物」一九七九・二）と同様に、短篇と長篇の違いはあっても、小説の組み立てという面から見ればこれもまた、神戸に根を下ろして暮す中国人の「私」と、その周囲で生活する華僑の人びととの交渉が身辺雑記風に語られるうち、やがてその陥穽に潜んでいたミステリーが頭を擡げてくるという独特なストーリーラインを持っている[12]作品なのだが、その中で「私」が、日中が戦火を交えていた頃、「私」の友人の張範訓が人妻となっていた温昭媛に思慕の炎を燃やしながら徘徊していた、そしてその頃の自分もやはり一途に、懸命になって生きようとして同じ場所を行き来していた北野町界隈のとある路地に、その時から長い年月が流れすぎたいま、目を向ける場面がある。

そして、この時、「私」と連れ立って歩いていた若い友人は、こんな言葉を「私」に向って掛けた。「なんだか愛撫しているような目つきですね。このあたりのたたずまいを。……」。

その何日か前に、この近くに住む富豪の陸元南の死体が屋敷の庭で発見されたことに端を発する、犯人捜しの物語とは一見何の関係もないかのようなシチュエーション。が、犯人にとっても、「私」にとっても、自分の過去とつながるこの路地は、なつかしく、切なく、いまでもなお若き日の命の焔が〈燃える水柱〉となってゆらめき立つのが実感される場所なのだ。登場人物の分泌するものが、その路地のたたずまいを目で「愛撫」するという言葉のうちに込められているのである。

注

(1) 陳舜臣の自伝的小説『青雲の軸』（一九八四・二、集英社）の「第一部」中の一章「熱中の季節」や、李庚「神戸から世界

へ」（『陳舜臣中国ライブラリー6』「月報25」〔二〇〇一・五、集英社〕）を念頭において、こうした作家像を発想した。

(2) 『砂の器』は一九六一年七月に光文社から、『飢餓海峡』は一九六三年九月に朝日新聞社からそれぞれ単行本として刊行された。

(3) 選評「秀作を得て欣快」。

(4) 巻末エッセイ「人間という謎」（日本推理作家協会編『江戸川乱歩賞全集③危険な関係　枯草の根　新章文子　陳舜臣』〔一九九八・九、講談社〕）。

(5) 「推理小説私観」。

(6) 権田萬治「解説」（『枯草の根』〔一九七五・六、講談社文庫〕や、『陳舜臣読本』に再録された、中国歴史ミステリー集『紅蓮亭の狂女』（一九六八・九、講談社）についての相川司の解説など。

(7) 注(4)と同じ。

(8) 「名誉ある没落」とは「十八　懇談」で席有仁が興祥隆銀行（李源良）の運命を指して使った言葉だが、ここでは「三十二告白書」の一節を引いてこの銀行を見舞った悲運を確かめておく。たとえばこうある。「戦後における上海経済界の状況については、あなたもご存知のことと思う。言語道断であった。官僚資本が生殺与奪の権を握っていたのである。思い出しても腸の裂ける思いがする。民族産業はことごとく撲殺された。棍棒をのがれる術はなかったのだ。興祥隆銀行が融資した民族産業は、枕をならべて倒産した。従って、銀行も倒れたのである。なんとか救済の方策はないものかと、私はアメリカへまで行ったが、すべては失敗に帰した。永年夢みた理想は、一挙に根底からくつがえされたのだった。」――少し補足すると、抗戦中からすでにその傾向を示していた国民党の官僚資本の専横は、戦後になると「四大家族」（蔣介石・宋子文・孔祥熙・陳果夫）の支配の下、中国紡織建設公司の動向に見られるようにいっそう拍車がかかった。ただ、『枯草の根』が発表されてから時代が下って一九八〇年代以降になると、この中紡公司の歴史的評価をめぐっても、従来の官僚資本説とは異なる国家独占資本説、すなわち国家資本としての特権性や独占性は有するものの、後発国の工業化建設においては積極的な役割を果たしたとする捉え方が提示されている。

(9) 『境域を越えて　私の陳舜臣ノート』（二〇〇七・三、創元社）。

(10) 「道半ば　自伝　第二十二回　過ぎ行く牧歌時代」（『陳舜臣中国ライブラリー5』「月報22」〔二〇〇一・二、集英社〕）。

(11) 「日本占領期唯一共産党が指導した学生雑誌――戦争末期の上海『莘莘月刊』をめぐって」（高綱博文・竹松良明・石川照子

・大橋毅彦編『戦時上海のメディア――文化的ポリティクスの視座から』〔二〇一六・一〇、研文出版〕所収）。陳舜臣のミステリーが持つこうした特質に言及したものとして、『燃える水柱』を評した秋山駿の言は参考になる。『陳舜臣読本』からその一節を紹介しておきたい。「そして、実は、この「燃える水柱」を読み始めたとき、私は最初、これは推理物ではなく、自伝小説の続きなのかと錯覚したくらいである。なぜなら、主人公は、明らかに作者の陳氏自身であるし、彼の思い出とともに展開する戦前の生の断片は、ときに自伝小説より強いリアリティに輝いているからである。／そこで、私はとんでもないことを思い付いた。私は前言を翻し、これが、醇乎たる推理小説であるとする。すると、こんなタイプの推理小説、かつてどこに在っただろうか？つまり、作者の密度ある自伝的記述の間から、やがてゆっくりと「殺人事件」が出現してくる、といった推理小説が？これは新しいタイプの推理小説ではあるまいか。」（傍点大橋）――本論で考察する、北野町界隈のとある路地に向けられる「私」の視線のありようが、傍点を施した前半と対応するものである。また、短篇作品「異人館周辺」も、八〇歳になるまで独身で、「奇怪的老人」と噂されている趙さんと出くわした「私」が、誘われるままに彼の家を訪れ、彼の話を聞きいるうちに趙老人の祖父と父の死をめぐる、まだ解けていない謎に逢着する、つまり小説の終りになってミステリーが立ち上がってくるという感銘を与えてくる点で、傍点を施した後半と対応しているのである。趙老人がトーア・ロード沿いの路地奥の家に身を隠すようにして住んでいるのも、そうしたひっそりと忘れ去られているような場所であればこそ「謎」が立ち上ってくるという印象をもたらしてくる点で、巧みな設定だといえようし、さらに注目すべきは、この短篇が作品集『異人館周辺』刊行時には収録作品九篇中の最後に置かれている事実である。港町神戸に渦巻くさまざまな人間ドラマをロマンティック・ミステリー風に語りつづけてきた最後に、それを読み終える時点で、再び新たなミステリーが始まることを告げていく作品を配置したことは、人を食ったかのようで面白く、鮮明な印象となって刻まれる。

――文学部教授――